

阿部彩『子どもの貧困－日本の不公平を考える』岩波新書 2008 年

第 6 章 子どもにとっての「必需品」を考える

問題提起

3 貧相な貧困観

「このような状況で、「教育の平等」や「機会の平等」を訴えても、支持されないはずである。「教育の平等」「機会の平等」が支持されない社会とは、どのような社会なのであろうか。」(P210・L2)とあるが、なぜ、日本では「教育の平等」や「機会の平等」が支持されないのか。

D グループ：

日本では「貧しくても努力すれば成功する」という発想を持っている人が多く子どもが最低限享受すべきである生活の期待値が低いので、教育の平等、機会の平等に対する必要性が軽んじられているから。

C グループ：

政府が子どものいる世帯への支援を訴えてきたが、所得をベースとした相対的貧困の概念 (p205) が一般の国民には馴染みが薄く、理解されにくいから。

B グループ：

実際に子育てしていない人や貧困に直面していない人にとっては、子供の必需品や進学に対して他人事だと思ってしまうのではないだろうか。

A グループ：

金銭的な理由で与えられなくても仕方がないと考えてしまうのは、子ども期の貧困が将来のさまざまな状況に密接に関係しているということ（貧困の連鎖）に日本人の多くが意識できていないのではないか。そのため、最低限の生活水準を低くしか設定できないので、支持を得られない。